

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：44105

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K02261

研究課題名(和文)ルーブリック評価のIR分析を通じた介護実習の改善手法の開発

研究課題名(英文) Development of improvement methods for Long-term Care-work Practicum through IR Analysis of Rubric Evaluation

研究代表者

鷲尾 敦 (Washio, Atsushi)

高田短期大学・キャリア育成学科・教授

研究者番号：30259379

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：介護人材育成の教育課程において効果的な介護実習評価を実施するため、養成校、実習施設、学生が共有でき、介護実習で到達すべき能力指標と基準を掲載したルーブリックを開発した。それを用いて介護実習で学生による自己評価と実習指導者による評価を実施し、その結果データをIR手法で見える化した。その結果をポートフォリオとして学生が持ち、教員や実習指導者にフィードバックすることで、学生の成長と実習指導を連携したPDCAサイクルモデルを構築した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

介護人材育成において、介護実習は質の高い学修成果を得ることができ、さらに効果的なものにするには評価活動の改善が課題であった。本研究では、評価にルーブリックを用い養成校、実習施設、学習者と共有することで、評価の課題を克服し、さらに学生の成長を促す評価へと改善した。また、評価結果から実習状況をIR的手法で見える化し、その結果を学生や養成校、実習施設へフィードバックすることで、学生の成長と実習改善を促す二重のPDCAサイクルモデルを構築した。これは、職業教育における学修成果の見える化を実現した事例であり、また介護分野で急増する外国人留学生の適切な実習を進めるための根拠データを得る事例となった。

研究成果の概要(英文)：To carry out effective long-term care-work practicum evaluation in the long-term care human resources development curriculum, we have developed a rubric that can be shared by training schools, training facilities, and students, and contains ability indicators and standards that should be achieved in long-term care-work practicum. Using it, self-evaluation by students and evaluation by training instructors are carried out in long-term care-work practicum, the result data is visualized by IR method. The results are given to students as a portfolio and are feededbacked to teachers and care-work practicum readers. So, We were able to build a PDCA cycle model for student growth and care-work practicum guidance.

研究分野：教育工学

キーワード：ルーブリック 介護実習 実習評価 形成的評価 IR ポートフォリオ PDCAサイクル 介護人材育成

1. 研究開始当初の背景

(1) 介護実習における評価活動の課題

介護人材を育成する教育課程の介護実習は、質の高い学修成果を得るために必要不可欠である。実習の評価活動は、その後の学習の取り組み方に大きな影響を与える重要なものである。しかし実際の実習評価は、個々の実習施設指導者の評価観の違いが評価結果に差を生み、基準がないために、結果から学生の真の能力が見えづらく、学生の省察にはつながっていなかった。

(2) 職業教育における学修成果の見える化の必要性

「個人の能力と可能性を開花させ、全員参加による課題解決社会を実現するための教育の多様化と質保証の在り方について（中教審答申）」にあるように、大学における職業教育に対する学修成果の質保証についての議論が広く行われていなかった。

(3) ルーブリック評価のぶれの課題

ルーブリックを用いた評価を検討する中で、ルーブリックが持つ評価のぶれという特徴を踏まえ、記述語の曖昧性や漠然性を減らし評価基準の共通認識をどうもたせるかが課題であった。

(4) 実習評価データを用いた実習改善

養成校と実習施設との実習後の反省会では、具体的なエピソードや印象などで実習を振り返り課題を探っているが、データという根拠を用いての検証は少ない。

(5) 急増する外国人留学生の介護実習の在り方

コロナ禍前は、養成校への外国人志願者が急増していた。留学生には、日本語の問題、生活習慣・文化・考え方の違いがあり、人と心身ともに接触の多い介護においては、実習の成果がより求められる。外国人留学生の実習改善のための課題を明確にする必要があった。

2. 研究の目的

前述の背景にある課題を解決するため、本研究は介護実習で到達すべき能力指標と基準を養成校と実習施設と学生が共有できるルーブリックを開発するとともに、評価結果を IR 分析し、学生の自己省察や実習に関わる指導者による実習 FD にフィードバックする手法を構築し、質の高い介護人材育成に寄与することを目的とした。下位目標は次の 4 点である。

(1) 介護実習の評価システムの改善による評価の見える化

今までの実習評価の課題は、評価の観点は設定されているが、基準が明確でないことであった。本研究では、その差が生じない適切な評価が可能となり、学生、養成校、実習施設で評価基準を共有できる介護実習評価のルーブリックの開発をする。

(2) 曖昧性やぶれのないルーブリックの開発

ルーブリックは、評価のぶれが生じやすいという問題も持ち合わせている。適正な評価結果を得るには、この基準作りが課題であり、漠然性や曖昧性といった観点からルーブリックの実例を検証し、評価者の主観等によるぶれが生じにくい評価基準の記述ルールを検討する。

(3) 質の高い介護福祉人材を育成するための評価活動の PDCA サイクルの構築

本研究では、介護実習においてルーブリックを用いた実習評価の結果（学生の自己評価と実習施設指導者評価）を学生にフィードバックするだけでなく、評価データを IR 分析で見える化して実習 FD につなげ、実習や実習評価の改善に努める。実習準備、実習、振り返りなど実習に関連する科目や活動を含めた実習評価活動全体の PDCA サイクルを構築する。

(4) 質の高い外国人介護福祉人材の育成

質の高い外国人介護福祉人材養成を進めるために、ルーブリックを用いた評価データを IR 分析した結果から外国人留学生の特徴や課題を抽出する。

3. 研究の方法

本研究は、2016 年度より介護実習評価の課題解決を目的にルーブリックの開発を進めた。これまで評価に使用されていた「介護実習の手引き・介護実習ノート」（三重県介護福祉士養成協議会作成）の評価票や評価についての記載部分を検証し、共同研究者と議論を重ね実際に活用できるルーブリックの試作版を開発した。2018 年度には実習先施設に対し試作ルーブリックを用いた評価を依頼した。科学研究費助成期間からは次のように進めた。

【2019 年度】2018 年度試作したルーブリックを用いて実習評価活動を行い、学生の自己評価及び実習先指導者による評価データを得た。また、評価活動が終わってから学生及び実習指導者に対し評価に関するアンケートを実施した。評価結果の分析からは実習の状況を検証し、アンケート結果からは、ルーブリック評価の効果を検証した。また、実習改善の根拠を示すためにどのような分析をし、学生には個々の評価からどのような指導を行うか等を共同研究者と議論した。

これらの分析と同時に、学生や実習指導者にルーブリックの記述についてアンケート調査、実習指導者や養成校の実習担当者へインタビュー調査をし、共同研究者と議論を重ね、ルーブリックの改善を進めた。また、留学生と日本人学生の評価結果の傾向の違いを分析し、留学生に対する評価の在り方、実習方法の改善の検討などを進めた。

【2020 年度】改善したルーブリックを用いて、実習評価活動及びその実施に関するアンケート

調査を継続実施した。2019 年度に用いた分析手法とは別の角度から分析を進め、学生、実習施設指導者や養成校教員へフィードバックした。これらの活動を通して、ルーブリックの見直し、評価活動の方法の改善、外国人留学生の実習の課題と成果について検証した。各実習において、ルーブリックを用いた実習の評価活動を継続し、結果データの収集、分析を進めた。

【2021 年度】卒業までの 2 年間全ての介護実習の評価をルーブリックで行った学年(2019 年度入学生)の評価データを整理し分析を進め、現場に適した見える化の方法を検討した。また、実習評価活動の PDCA サイクルについて検討し実現可能な理想モデルの構築を目指した。

4. 研究成果

(1) ルーブリックの開発

2016 年度より、介護実習評価に用いるルーブリックを検討し開発を進めた。それまでの評価に使用されていた「介護実習の手引き・介護実習ノート」の評価票や評価についての記載部分を検証するところから始め、共同研究者と議論を重ね実際に活用できるルーブリックの試作版を開発した。2018 年度には実習先施設に対し試作ルーブリックを用いた評価の実施を依頼するとともに、実習施設担当者及び学生にアンケート調査を行なった。この結果及び実習担当教員や実習先施設指導者へのインタビューを行いながら共同研究者と議論を進め、ルーブリックの改訂を進めた。作成したルーブリック改定は、最初のルーブリックが 2017 年 2 月に作成されてから、2021 年 2 月までの間で 7 回の改訂を行い、5 つの領域、16 の項目、26 の着眼点、75 の評価指標となった。表 1 はこの段階のルーブリックの一部である。このうち、実習 1 は 52 指標、実習Ⅱ・Ⅲは 73 指標用いる。基準は三段階で「できる」「しようとしている」「できない、しようとしていない」を基本にもった記述語で各指標でのレベルを記述している。それぞれ 5, 3, 1 点の評価点をつけるが、その間に相当するものについては、評価のガイドラインを用意して、それに基づき、4 点や 2 点をつけることとしている。また、実習先によって実施していない評価指標について個々に斜線をつけて評価しないことを申し合わせるものとしている。各指標には 3 つの評価段階のほか、実習での評価目標と将来の介護福祉士としての姿を提示している。従来の評価項目に相当する評価の着眼点ごとにコメント欄を設け、具体的な事項を書けるようにして学生が振り返りしやすいようしている。留学生向けには、ルビを振ったものを別に作成した。

表 1 開発ルーブリックの一部

評価領域	評価項目	評価着眼点	評価指標 (目標)	1点 できない しようとしていない	3点 努力中 しようとしている	5点 実習の目標 できる、ほぼ達成	実習Ⅰ	実習Ⅱ	コメント欄	介護福祉士の姿
介護活動	実習準備 実習開始	利用者のニーズに合わせたケアの実施ができる	レクリエーション企画を立て、実施できる	レクリエーション企画を立てていないし、実施できない	レクリエーション企画を立てようとしている	レクリエーション企画を立て、実施できる	—	—		レクリエーション企画を立て、実施している
			利用者のニーズに合わせたケアの実施ができる	利用者のニーズに合わせたケアの実施ができていない	利用者のニーズに合わせたケアの実施をしようとしている	利用者のニーズに合わせたケアの実施ができていない	利用者のニーズに合わせたケアの実施ができていない	利用者のニーズに合わせたケアの実施ができていない		—
継続 福祉 意識	利用者に対する思いやりを示すことができる	利用者に対する思いやりを示すことができる	利用者に対する思いやりを示すことができる	利用者に対する思いやりを示すことができない	利用者に対する思いやりを示すことができる	利用者に対する思いやりを示すことができる	—	—		利用者に対する思いやりを示すことができる

(2) 評価データを用いた学生状況の把握

ルーブリックで記載された各学生の自己評価及び施設の実習指導者による評価をもとにして、様々な分析を試みた。ルーブリックで得られる評価データは、指標ごとに 1 点から 5 点の点数がつく。一人の学生に対し全評価指標の自己評価と実習指導者による評価の得点データが得られる。これらのデータを学生全体の自己評価結果や指導者評価結果として集計し自己評価と指導者評価の違いをみたり、両者の相関をみたり、日本人学生と留学生別に求めたりができる。表 2 は、2019 年度

表 2 2019 年度生が取り組んだ各実習ルーブリックの「評価の着眼点」と「指標数」

領域	項目	着眼点	指標数	実習Ⅰ	実習Ⅱ	実習Ⅲ
実習準備	準備性	実習前に取り組みが確認される	1-7	4	7	6
	協働性	職員・利用者・実習生との協働性がある	8-12	5	5	4
	準備環境	利用者のプライバシー保護意識がある	13-16	4	4	4
	礼儀	挨拶を守り礼儀正しく挨拶できる	17-21	5	5	5
	健康意識	自分の健康に留意できる	22-23	2	2	2
介護活動	目標設定・実践・振り返り	自分の立てた目標に向かって実践できる	24-28	5	5	5
	コミュニケーション	意思疎通を図る	29-30	2	2	2
	認知	利用者との意思疎通が図れる	31-36	4	6	5
		施設上の意思疎通が図れる	37-38	2	2	2
	生活文化理解	利用者の生活が理解できる	39-43	4	5	5
		利用者の基本的生活習慣のニーズを知ることができる	44-45	2	2	2
		生活者としての身体的・精神的・社会的な立場から理解が図れる	46-48	0	3	3
		介護実習を通して、利用者の生活が理解できる	49	0	1	1
		生活文化に合わせた介護の必要性を理解して実施できる	50-56	3	7	7
	介護用具の適切な使用	利用者に応じた正しい使用ができる	57-58	1	2	1
介護に必要な知識が図れる		60-61	0	2	2	
利用状況を分析し、介護ニーズや課題を把握できる		62	0	1	1	
実習現場で具体的な介護計画が立案できる		63	0	1	1	
介護計画に合わせた実践が実施できる		64	0	1	1	
介護実践の振り返りができる		65	0	1	1	
報告		介護実践を的確に表現して、適切な反応や行動ができる	66-67	2	2	2
施設と連携	介護現場を的確に表現できる	68-73	5	6	6	
	利用者や変化に対応など、報告を要する事項を把握し、報告できる	74-76	3	3	3	
	施設長の理解	施設長が施設の理念を理解できる	77	1	1	1
施設と連携	施設長の理解	施設長の理念を理解し、介護福祉士の役割と、専門職としての連携と協働の意識が図れる	78-81	2	4	4

入学生が各実習時点で使ったルーブリックの構造と評価指標の個数を示している（最終の指標数とは異なる）。これらの集計を様々な切り口で分析することで、高田短期大学キャリア育成学科介護福祉コース学生の傾向を知ることができた。それを紀要や実習反省会、学会等で随時報告

をした。ここでは、数年にわたる分析で継続して見られた本学学生の特徴的な傾向を一部示す。

- ・「実習態度」は日本人学生も留学生も大変良いが、ともに「積極性」に欠けていた。
- ・留学生は比較的自己評価を高くする傾向があった。
- ・実習指導者は、留学生の言葉のハンディを考慮して高めの点数をつける傾向にあった。
- ・学生のコミュニケーション能力が低い傾向にある。特に施設利用者とのコミュニケーションに比べ、職員とのコミュニケーションに課題があった。
- ・しかし、実習を重ねるにつれてコミュニケーションは良くなる傾向にあった。
- ・記録をすることが留学生はもちろんであるが、日本人学生も苦手であった。
- ・学生の評価力（実習指導者との相関）は、学生により大きな差が見られた。
- ・学生の評価力は、日本人学生については実習が進むにつれて高くなる傾向が見られたが、言葉にハンディのある留学生は評価力が低く、半分程度の学生に評価の理解不足が見られた。
- ・3つの実習結果の推移から、学生の成長にはいくつかの成長パターンがあった。

(3) 介護実習におけるルーブリック評価データの見える化

ルーブリック評価結果を分析して実習改善の根拠に使うには、現場でできることが大前提となる。ハードルの高い統計ソフトウェアや統計的意味を見出すための高度な統計技術を用いず、基礎的な統計知識や EXCEL の知識のみで意義ある分析と見える化ができる方法を検討した。

①全体、領域、評価項目ごとの傾向

個々の学生の各指標の得点に重みをつけずに実習生全体、求めたい属性集団（日本人や留学生、各学年など）ごとに集計をする。全体、集団ごとに、実習ごとの全指標平均を、数値の大小で色をつけるカラーマップ化した表で示し視覚的にわかりやすく示せる（図 1）。実習の変化は折れ線グラフで示し（図 2）、学生全体や日本人学生、留学生などの集団ごとの分布状況を 2 種類のヒストグラム（図 3, 4）で示せる。箱ひげ図では、大まかではあるが層の変化を確認できる（図 5）。

②全指標の強み弱みの比較（各指標の全平均）

全員あるいは属性集団の強み弱みをレーダーチャートにする。項目数が多いので、折れ線グラフで表現をした方がわかりやすい（図 6）。これにより高い評価、低い評価が一目瞭然である。領域ごとに背景色を色分けすることで、領域ごとに傾向を俯瞰することもできる。また、これに実習 I, II, III の状況を重ねると変化が見える。また自己評価と実習指導者評価を重ね合わせると、それぞれの指標の特徴や学生の傾向が現れ、課題を発見するのに有効である。

実習領域	評価項目、指標名	自己評価			指導者評価		
		全体	日本人	留学生	全体	日本人	留学生
挨拶	挨拶のしぐさ・声かけ・目線・立ち方	3.91	3.67	4.15	3.97	3.82	4.05
挨拶	服装・身振・言葉・態度・声かけ・挨拶のしぐさ	4.21	4.10	4.28	4.31	4.03	4.49
コミュニケーション	挨拶・挨拶のしぐさ・声かけ・目線・立ち方	4.36	4.15	4.48	4.36	4.40	4.34
実習	実習態度・実習態度・実習態度	4.58	4.59	4.53	4.45	4.24	4.64
実習態度	実習態度・実習態度	4.59	4.76	4.59	4.56	4.65	4.50

図 1 カラーマップ

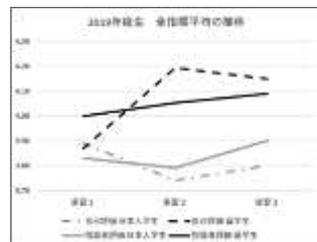


図 2 平均値の推移

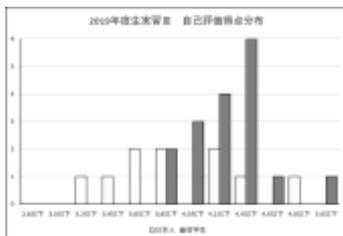


図 3 二集団を並置したヒストグラム

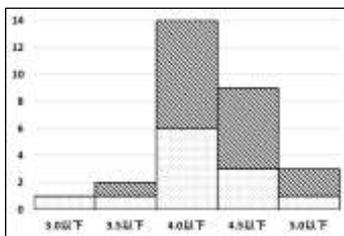


図 4 二集団の加算ヒストグラム

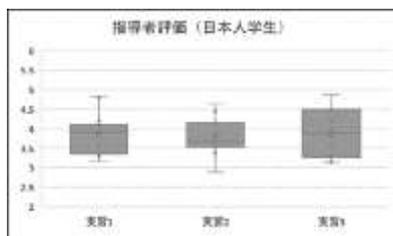


図 5 箱ひげ図による分布の推移

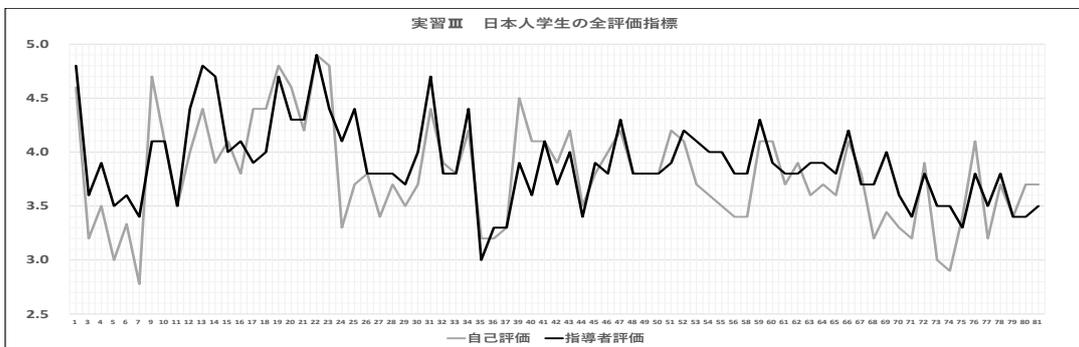


図 6 全指標の折れ線グラフ

※X 軸の番号は評価指標番号

③評価力（実習指導者評価と学生評価の相関）

学生の自己評価結果とその学生の実習担当者による評価結果との間の相関係数を、EXCEL の分析ツールの「相関」を使って求める。実習指導者の評価が正しいという前提であるが、相関係数が高ければ、学生とその実習指導者の評価に相関があるということになり学生に評価力があると判断する。その程度を相関係数で見ることができる。全学生や各学年や留学生といった属性集団が、どのように評価を理解しているのかを確認できる。図 7 は、留学生と日本人学生の分布の

違いや全体の傾向がわかる。図 8 は、実習の進行に従って評価力の変化の傾向が見える。図 9 は、相関係数を「強い正の相関」「正の相関」「弱い正の相関」「無相関」「弱い逆相関」などと、相関の強さ（相関度）をレベル分けし 100% 横棒グラフで示したもので、留学生と日本人学生の傾向や実習の進行による変化を見ることができる。

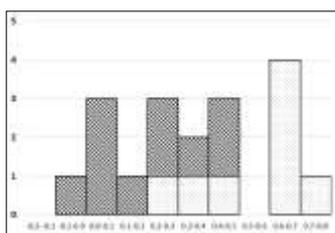


図 7 相関係数の分布

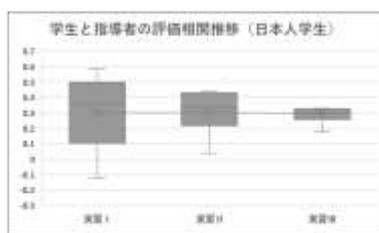


図 8 相関係数の推移(箱ひげ)

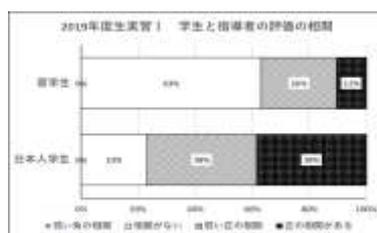


図 9 属性ごとの相関度の違い

④個々の学生の分析

学生の自己評価、実習指導者評価を実習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲとプロットし、その変化を学生の成長の変化と捉える。成長の変化のパターンに特徴が現れる(図 10~12)。本学では介護実習ⅡとⅢが同じ目的の実習であるため、実習ⅡからⅢの変化に着目している。これを、ポートフォリオに載せると良い。なお、ポートフォリオには、前述のレーダーチャートを掲載するのもよい。

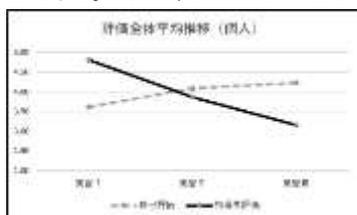


図 10 成長パターン例①

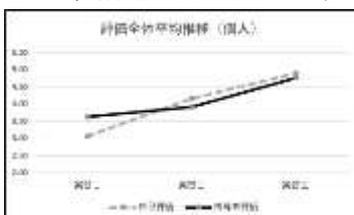


図 11 成長パターン例②

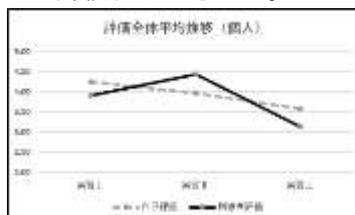


図 12 成長パターン例③

(4) 介護実習におけるルーブリックを用いた評価活動の PDCA サイクルモデルの提案

ルーブリックを用いた介護実習評価活動を中心においた学生の成長と介護実習改善のための PDCA サイクルモデルを構築した(図 13)。この実習評価の PDCA サイクルは、「介護実習改善」を進めるプロセスと、「学生の介護能力改善」の学習プロセスの二重構造になっている。

「介護実習改善」サイクルは、教員による実習指導計画 (P) に基づいた介護実習の事前指導と介護実習及び実習中の指導 (D) を行い、ルーブリックによる学生や施設実習指導者による評価活動とその結果に基づいた IR 分析 (C) を行い、その結果を受けて実習担当教員や施設実習指導者と実習の反省及び改善を検討し (A)、次なる指導計画 (P) に着手することである。つまり、実習の学習成果であるルーブリック評価データを IR 分析した結果をもとに、担当教員ならびに実習担当者も実習の反省とさらなる実習改善に向けた検討を行う。

「学生の介護能力改善」サイクルは、学生が実習前に目標設定 (P) をして実習に臨み、教員による事前指導があり、実習し、実習中にも指導を受ける (D)。実習後、ルーブリックによる自己評価をし (C)、さらに施設実習指導者の評価結果と照らし合わせてさらなる省察を行い自分の改善すべき点を明確にする (A)。そして、次なる実習に向けて実習前目標を明確にする (P)。つまり、学生においても、実習の評価結果を元に省察を行い、次の実習に向けて目標を明確にする。この時、学生のサイクルに必要なのが、一人ひとりのルーブリックの結果と省察を記録する「実習ポートフォリオ」である。今回の研究期間内にはポートフォリオを活用するまでには至っていない。

今後の課題は、結果をより早くフィードバックし改善を効果的に進められるよう、ポートフォリオの記載内容を明確にするとともに、ルーブリックとポートフォリオをデジタル化し、ルーブリック評価や省察結果の入力も Web 上でできるようにシステム化することである。さらに、IR 分析も自動化あるいは簡単なルーティン業務でできるようにする必要があると考えている。

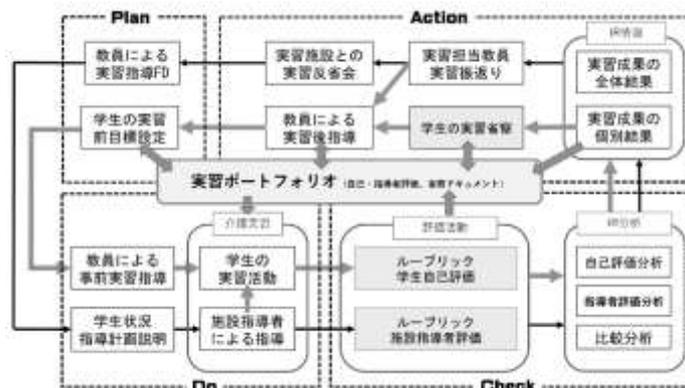


図 13 ルーブリックを用いた介護実習の評価活動の PDCA サイクル

今後の課題は、結果をより早くフィードバックし改善を効果的に進められるよう、ポートフォリオの記載内容を明確にするとともに、ルーブリックとポートフォリオをデジタル化し、ルーブリック評価や省察結果の入力も Web 上でできるようにシステム化することである。さらに、IR 分析も自動化あるいは簡単なルーティン業務でできるようにする必要があると考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 鷺尾敦、福田洋子、野呂健一、賣來敬章	4. 巻 第39号
2. 論文標題 ルーブリック評価から得た介護実習における学生の成長分析の試行	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高田短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 pp.13-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田洋子、鷺尾 敦、野呂健一、賣來敬章	4. 巻 第7号
2. 論文標題 介護実習の質の向上を目指したルーブリック改善の取り組みと課題	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報	6. 最初と最後の頁 pp.9-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷺尾 敦、福田 洋子、野呂 健一、賣來 敬章	4. 巻 38
2. 論文標題 介護実習ルーブリック評価結果を用いた学生の実習分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高田短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 pp.23-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷺尾 敦、福田 洋子、野呂 健一、賣來 敬章	4. 巻 6
2. 論文標題 介護実習 のルーブリック評価の検証 - 3つの介護実習を通したルーブリックを目指して -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報	6. 最初と最後の頁 pp.28-39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野呂 健一	4. 巻 6
2. 論文標題 実習評価ルーブリック評価基準に見られる記述の問題点	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報	6. 最初と最後の頁 pp.20-27
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鷺尾 敦	4. 巻 40
2. 論文標題 2年間の成長を可視化する介護実習ルーブリックを用いた教学IR分析	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高田短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 pp.49-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福田 洋子	4. 巻 40
2. 論文標題 介護実習におけるルーブリック評価導入後の現状と課題 実習の効果的な学びを目指してー	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高田短期大学紀要	6. 最初と最後の頁 pp.13-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 野呂 健一	4. 巻 8
2. 論文標題 実習評価ルーブリック策定における表現上の工夫と課題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報	6. 最初と最後の頁 pp.35-41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 竇來 敬章	4. 巻 8
2. 論文標題 ルーブリックを用いた実習評価の課題と可能性	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 高田短期大学キャリア研究センター紀要・年報	6. 最初と最後の頁 pp.54-61
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 鷲尾 敦・福田洋子・野呂健一・竇來敬章
2. 発表標題 学生が初めて臨む介護実習のルーブリック評価の検証と今後
3. 学会等名 大学教育学会 第42回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 福田洋子、野呂健一、竇來敬章、鷲尾敦
2. 発表標題 介護実習におけるルーブリック評価の導入
3. 学会等名 大学教育学会 第41回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鷲尾敦、福田洋子、野呂健一、竇來敬章
2. 発表標題 介護実習のルーブリック評価データから見えてくるもの
3. 学会等名 教育工学会 2019年秋季全国大会(第35回)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	福田 洋子 (fukuda yoko) (60817584)	高田短期大学・キャリア育成学科・准教授 (44105)	
研究 分担者	野呂 健一 (noru kenichi) (80594407)	高田短期大学・キャリア育成学科・教授 (44105)	
研究 分担者	竇来 敬章 (horai takaaki) (80638114)	高田短期大学・子ども学科・准教授 (44105)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------